

笹川記念保健協力財団 研究助成  
助成番号：2014A-11

[様式 E-1]

2015年2月20日

公益財団法人 笹川記念保健協力財団  
理事長 喜 多 悦 子 殿

2014年度ホスピス緩和ケアに関する研究助成

## 研 究 報 告 書

研究課題

ホームホスピスにおけるケアの概念化ー “もう一つの家族” の視点からー

所属機関・職 一般社団法人フッフル・理事  
研究代表者氏名 松原 みゆき

## I 研究の目的

本研究の目的は、日本で2004年に宮崎で始まり全国に広まったホームホスピスの、ケアの中心概念のひとつと考える“もうひとつの家族”について、ホームホスピスに勤務する者がどのように考えているのかをインタビューを通じて記述し、「互助や共同体」としてとらえられるケアの実態を明らかにすることである。

## II 研究の内容・実施経過

### 研究の内容

研究の内容については、1. ホームホスピスの調査、2. 研究会、3. 講演会とシンポジウムの3項目に分けて報告する。

#### 1. ホームホスピスの調査

まず2014年4月、5月、6月に先行研究を参考に質問紙調査のフォーマットを作成した。**【事前質問調査】**、**【当日質問調査（スタッフ・利用者）】**、**【当日質問インタビュー】**である。質問紙調査用紙は資料に添付する。

#### 【事前質問紙調査】

具体的には、3つの視点から〔I〕施設運営、〔II〕医療圏・生活圏の中での連携、〔III〕地域での活動、について作成した。

次いで、平成26年6月、7月、8月には3か所の調査を行った。3か所の選定理由は、広島にあるホームホスピスマろんの家と比較検討するために、環境が近い（高齢化率35%以上、郊外の農村部にある、西日本にある）だからである。また宮崎のかあさんの家については、多くの事例報告や紹介が実施されていることから対象としなかった。

#### 〔I〕施設運営

事業所の運営母体の組織名称は、一般社団法人1件、特定非営利活動法人（NPO）2件であった。運営母体を同じくする関連事業所は、訪問介護事業所2件、グループホーム（認知症対応型）1件であった。ホームホスピスの勤務体制について専従常勤者は、平均週43時間、勤務していた。パートは、平均週18.7時間、勤務していた。勤務シフト別の勤務時間の基本は日勤9時間（休憩時間を含む）と夜勤17時間（休憩時間を含む）の組み合わせである。遅出の9時間勤務（休憩時間を含む）と、短時間勤務という4時間、5時間、7時間勤務というパターンを作り、スタッフ自身が勤務しやすいように彼らの生活時間に合わせたシフトを組み工夫をしていた。補修・改築費や家賃などに補助や助成を受けていた。利用者が生活しやすいように、玄関先のスロープ、フローリング、室内の段差をなくす、浴室、脱衣室、トイレ、窓や網戸、部屋のレイアウト、ベッド（福祉用具よりのレンタル）、庭を工夫していた。利用者の生活スペースの広さについては、下記の表1を参照されたい。

表 1. 利用者の生活スペース

名称(単位)	A	B	C
部屋(畳)	6	6	8、4.5
台所(畳)	6	8	4.5
食堂(畳)	6	8	4.5
リビング(畳)	無し	8	無し
脱衣所(畳)	2	3	3
浴室(畳)	2	3	3
トイレ(畳)	1	2か所1と1	2
スタッフ控室(畳)	6	特に無し	特に無し
家族が泊まる部屋(畳)	6	6	4.5
会議室(畳)	無し	6	3
事務室(畳)	無し	6	無し
物干し場(m <sup>2</sup> )	10	2か所	10以上
庭(m <sup>2</sup> )	10	10以上	30以上
畑(m <sup>2</sup> )	30	無し	30以上

利用者が介護に使用する物（利用者がレンタルした物も含む）は、ベッド、ポータブルトイレ、車いす、浴室用介護チェア、口腔ケア用品であった。医療機器は体温計、血圧計、素飽和度測定器、聴診器、在宅酸素吸入器を置いていた。

## 〔Ⅱ〕 医療圏・生活圏の中での連携

連携している事業所・組織は、地域の病院、老健施設、地域包括支援センター、居宅介護支援事業所、訪問看護事業所、訪問介護事業所と行っていた。

## 〔Ⅲ〕 地域での活動

広告用パンフレットはポスティングし、集会所、近隣の商店、ガソリンスタンド、公民館、社会福祉協議会、地域福祉センター、地域包括支援センター、居宅介護支援事業所、訪問看護事業所、訪問介護事業所、老健施設、病院などに置いていた。地域の活動の新年会、総会、清掃、祭り、募金活動・寄付・布施・喜捨にも参加していた。さらに広報活動をするために、値段が高くてあえて近隣の商店を利用することもあった。反対に地域で収穫した野菜などをいただくこともあった。

## 【当日調査/スタッフ・利用者】

スタッフは、車で30分圏内（15キロメートル圏内）から通勤しており、常勤よりも非常勤職員（パート）が多く、その勤務時間帯もそれぞれの生活に合わせたシフトになっていた。

利用者は80歳代から100歳に近い年齢で、女性が多かった。1施設3人から5人の利用者があり、介護度はⅢ以上であった。車で30分圏内（15キロメートル圏内）からきており、

一人暮らしがほとんどであった。家族は近隣に住む人もいるが、県内や県外にいる場合が多かった。

### 【代表者へのインタビュー】

代表者へは、以下の6項目について半構成的面接を行った。1. どのような経緯でホームホスピスの仕事にかかわる動機やきっかけ、2. 仕事で心がけていることや大切に考えていること（信条など）3点。3. 仕事のやりがいについて、4. 仕事の中で、「たいへんだなあ」と思うこと、どのようなときにそう思うか、5. 特に印象に強く残っている思い出や出来事を3点、6. 将来の夢、である。この中で共通していたことは、それぞれの家族の看取りをして思いが残っていたこと、前職でやり残したことがある人たちが始めていることがわかった。

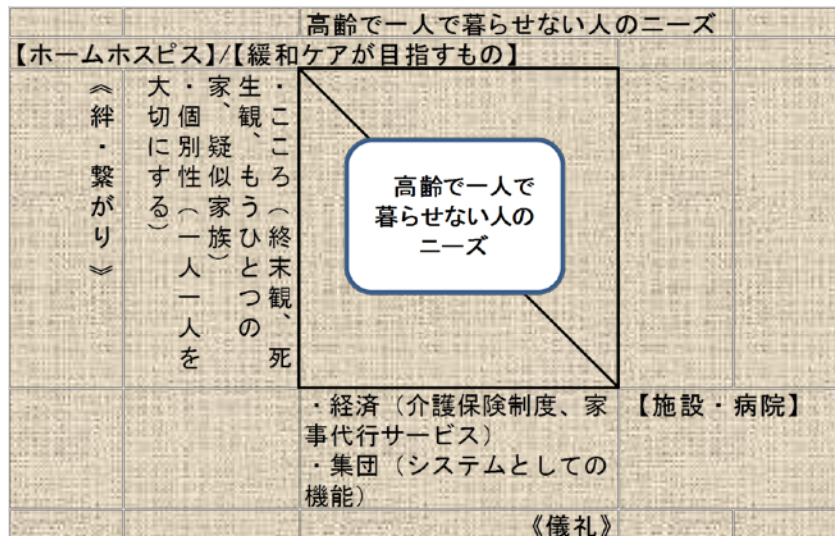
これらの調査から、日本の少子高齢化と家族の変容や、介護支援の国家的なしくみとのズレが、ホームホスピスを生み出していると考えているところである。今回得た情報をさらに分析・整理をし、「互助や共同体」としてとらえられるケアの実態を明らかにする。

## 2. 研究会

研究会は、2014年11月10日（月）14:00～17:00、広島大学大学院医歯薬保健学科棟610ゼミ室にて実施した。講師は辰己俊見氏（元行政職、健康サポーター、広島大学大学院医歯薬保健学研究科博士課程後期在籍中）と、恒松美輪子氏（元行政職、広島大学大学院医歯薬保健学研究科・特任助教）に依頼した。テーマ「高齢者を支えるしくみを行政が支えてきた歴史～保険制度から」について、ディスカッションを行った。

まず、松原からホームホスピスについて、ホームホスピスが生まれた背景、現状、介護保険制度の利用、制度外老人ホームとの違いについて説明した。ディスカッションした主な内容は、終末期の人間を看るにあたり宗教観・死生観をどのように持つのか、宗教観と経済の論理との兼ね合いが大事である、という点である。人は「家で死にたい」というが、帰りたい家が皆違い、人は楽しい思い出があった時の象徴としての“家（もうひとつの我が家）”に戻りたい、と思うのであろう。ホームホスピスは、利用者が“家”だと思えるようなことを実践することが必要であろう。日本の場合、昔は寺社がコミュニティの中心であったが、特に介護保険制度が始まって以後（2000年）、介護の社会化が起こり地域（コミュニティ）や共同体のつながりが断たれてきている。共同体やコミュニティが“家”ならば、地域住民や家族らが集う場所となる。

以下、高齢で一人で暮らせない人のニーズを下記にイメージ化した。



### 3. 講演会とシンポジウム

講演会とシンポジウムは、2014年12月14日（日）13:30~16:00、広島市のまちづくり市民交流プラザ5階研修室Cで開催した。参加者39名（最大60名収容の施設）であった。参加者の2/3は女性で、60代以上がほとんどであった。その背景は高齢者の生き方について、自分自身や家族らの問題と考え、主体的に参加していた。

テーマは「高齢者の生き方と終の住処を考える」である。基調講演会は「老いに寄りそい、病に連れそう-老いと死から逃げない生き方」で、京都市にある社会福祉法人老人ホーム「同和園」附属診療所・所長で中村仁一医師（ナカムラジンイチ）である。中村仁一医師は1996年4月より、市民グループ「自分の死を考える集い」を主宰し、毎月京都市内にて例会を開催し220回を数える。『大往生したけりや医療とかかわるな-自然死のすすめ』（幻冬舎新書、2012年）など著書も多数ある。今回、「老・病・死」をわが事として引き受ける覚悟をし、「医療」には過度の期待をせず、「限定利用」を心がけ「死を視野に」入れて生きることについて、講演した。

次いで、シンポジウム「もうひとつの我が家としてのホームホスピス」を開催した。コーディネーターは八巻恵子氏（就実大学准教授・広島大学マネジメント研究センター客員研究員）、パネリストは松原みゆき（一般社団法人フッフール・理事）、栗山恵子氏（ホームホスピスマろんの家・代表）、亀田浩子氏（ホームホスピスゆずの家・代表）、コメントーターとして中村仁一医師である。

最初に松原が、現在の社会が置かれている状況と、『終の住処』や「もうひとつの我が家」と言われるホームホスピスの特徴やその背景、宮崎市や兵庫県で広がる支援や日本財団の在宅ホスピス・リーダー養成についての説明とその広がりについて説明した。図1は2014年12月7日市原美穂氏講演資料より掲載した。



図1. 2014年12月7日市原美穂氏講演資料より

その後、広島にある、ホームホスピスマろんの家とゆずの家で実践している様子を、それぞれ代表の栗山恵子と亀田浩子が説明した。そして、参加者も交えてディスカッションを行った。その内容は、最期をみとる医師との関係、家族との関わり、自分の生き方についての相談などがあり、参加者の関心の高さが感じられた。写真はディスカッションの様子である。



## 実施経過

実施経過については、研究期間の前半は高齢化率 35%以上の 3 カ所のホームホスピスの見学と調査を実施した。合わせて地域の特徴（町史など）についても文献調査を実施した。後半は研究会、講演会とシンポジウムを開催し、研究成果の一部（日本のホームホスピスの現状）と広島活動（まろんの家とゆずの家）について、一般市民に公表した。合わせて、“一般市民からの声”もディスカッションを通して聞く機会とした。

学会での研究成果の公表については、研究期間を通して 4 回行った。特に国際学会で 3 回発表する機会を得た。海外の研究者と意見交換をする中で、米国の先行研究 Andrea Sankar 氏の著書『Dying at Home: A Family Guide for Caregiving (John Hopkins University Press 1991)』の紹介を受けた。さらに世界の高齢者の現状と比較検討をすることも、日本の現状理解につながるが見えた。

実施経過の詳細については、下記の表 2 に記す。

表2. 実施経過の詳細

月別	研究計画	研究経過
2014年4月	・ 先行研究のレビュー ・ 質問紙調査の作成	・ 先行研究のレビューを研究期間中、継続して実施 ・ 質問紙調査用紙（事前・当日）の作成
5月18日 5月22日	・ 研究成果の発表（千葉） ・ 質問紙調査の作成	・ 日本文化人類学会50周年記念国際研究大会・国際人類学民族科学連合(IUAES)合同開催：Creativity in business (Commission on Enterprise Anthropology)【八巻口頭発表】 ・ 面接日の日程調整、調査依頼書の発送
6月7-9日 6月14-15日 6月22日	・ 調査実施（広島・まるんの家） ・ 見学（熊本・われもこう） ・ 研究成果の発表（東京）	・ 質問紙調査と半構成的面接法によるインタビュー、地域の調査を実施【八巻・松原】 ・ 「われもこう」の見学と意見交換【八巻・松原】 ・ 第29回日本保健医療行動科学学会学術大会・東京、ひとり暮らしが困難な高齢者の住み家—ホームホスピスの起源についての一考察—【松原口頭発表】
7月6-8日	・ 調査実施（長崎・オハナの家）	・ 質問紙調査と半構成的面接法によるインタビュー、地域の調査実施【八巻・松原】
8月25-26日	・ 調査実施（熊本・縁の家）	・ 質問紙調査と半構成的面接法によるインタビュー、地域の調査を実施【八巻・松原】面接内容の逐語記録作成と分析
9月12日 9月16日	・ 中間報告書及び中間収支状況報告書提出 ・ 研究成果の公表（ロンドン）	・ 中間報告書及び中間収支状況報告書作成 ・ 第7回国際保健医療行動科学会議（The 7th ICHBS）, A new type of abode for elderly who cannot live alone: a consideration for one type of home hospice【松原ポスター発表】
10月10日 10月21日	・ 研究会準備開始 ・ 講演会準備開始	・ 研究会の内容を検討した ・ 講演会とシンポジウムの内容の検討を始めた。
11月10日	・ 研究会開催（広島）	・ テーマ：「高齢者を支えるしくみを行政が支えてきた歴史～保険制度から」 講師：辰己俊見氏、恒松三輪子氏 内容：介護に関わる歴史的背景から現在の介護保険制度の成り立ちについてディスカッションを行った。
2015/12/14 12月21日	・ 講演会とホームホスピスのシンポジウム開催（広島） ・ 研究成果の発表（韓国）	・ テーマ「高齢者の生き方と終の住処を考える」 講演者：中村仁一医師 司会：八巻恵子 シンポジスト：松原みゆき、栗山恵子、亀田浩子 ・ IUEAS2014 Inter-Congress, Home Hospice: Anthropology work of Service Industry【八巻口頭発表】
2015年1月 1月13-14日	・ 調査の整理、分析とまとめ ・ 研究報告書及び収支報告書作成	・ 調査の整理、分析とまとめ、研究報告書及び収支報告書作成を継続して実施
2月13日	・ 研究終了 2月13日	・ 収支報告書作成・提出
2月20日	・ 研究報告書及び収支報告書提出	



### Ⅲ 今後の課題

2015年度も笹川記念保健協力財団より、ホスピス緩和ケアに関する研究助成に採択（内定）して頂いた。継続して調査・研究できる環境を整えていただき、感謝申し上げます。

2015年度への課題は、都市部や東日本にあるホームホスピスでの調査を実施し、これまでの調査結果と比較検討することである。日本では2004年に宮崎で始まり、全国19箇所（2014年12月現在）に広まったホームホスピスが、ケアの中心概念のひとつと考える“もうひとつの家族”について、ホームホスピスに勤務する者がどのように考えているのかをインタビューを通じて記述している。そこでは、「互助や共同体」としてとらえられるケアの実態を明らかにするものである。2014年度は高齢化率35%以上の地方都市にあるホームホスピス3カ所の調査を実施した。その結果、所属する共同体や地域に合わせて変化していることがわかった。2015年度は都市部や東日本にあるホームホスピスでの調査を実施し、比較検討を試みる。

### Ⅳ 研究の成果等の公表予定（学会、雑誌）

本研究の成果は、2015年度も関連する学会や雑誌へ公表する。具体的には2015年6月20-21日開催予定の日本保健医療行動科学会学術大会（京都）で、口頭発表する予定である。さらに国際学会でも発表する予定である。